

## 弥陀とは何ぞや

### 阿弥陀とは

- 甲「阿弥陀仏とはどんなものだ。」  
乙「阿弥陀とは、無量寿、無量光の覚者ということだ。」  
甲「釈尊とどういう関係があるのか。」  
乙「釈尊をはなれて阿弥陀仏はあるのではない。しかし、釈尊は阿弥陀仏ではない。」  
甲「それはまたどういう意味か。」  
乙「弥陀とは釈尊を釈尊たらしめたものだ。それは同時に、親鸞を親鸞たらしめたものだ。二にして一、一にして二。」  
甲「それなら釈尊だけでいいじゃないか。」  
乙「そこだ。釈尊は華嚴、涅槃、法華のいわゆる聖道門の經典では、釈迦牟尼仏は久遠実成の仏であって生滅を越えた仏である。地上で正覚を得たのではなく、古に正覚を成就して生もなく死もないことを説いている。すなわち地上八十歳の寿命の釈迦でなくて、その背後にあつて永久不滅のものを釈迦牟尼仏と言つておるのである。」  
甲「なるほど。」  
乙「しかるに、大無量寿経では、無量寿仏は我ならぬものとして説かれ、釈尊自身が仏々相念とて阿弥陀仏を念じていられる。すなわちいわゆる弥陀三昧に入つて、弥陀を説かれたのである。われらはこの大無量寿経において、釈迦の上に弥陀を仰ぎ、弥陀のうちに釈迦を見出すのである。すなわち、弥陀は釈迦を釈迦たらしめた久遠の本地であり、釈迦は弥陀の現実への応現である。だから釈迦をはなれて弥陀はなく、弥陀をはなれて釈迦はない。二仏はまったく一体である。」

### 教主と救主

- 甲「それでは釈迦は用事はないのか。」  
乙「そうではない。親鸞聖人は釈迦の古に帰つて、釈迦を真似、釈迦を追い、釈迦時代を再び実現することを断念して、永遠に現前する弥陀に帰したのである。」  
甲「待つてくれ、弥陀は永遠に現前するとは何のことか。」  
乙「釈尊は二千数百年昔の仏で、すでに地上から去つた。しかし、釈尊の上にあられた弥陀仏は永遠に滅びないで、つねに一切衆生の上に今よびかけているのだ。その永遠に今の仏だから、現前すると言つたのだ。」  
甲「なるほど、散つた花は追わないで、今の花の上に生きている力に帰られたのか。」  
乙「そうだ。」  
甲「それなら、ますます釈尊には用事はないではないか。」  
乙「しかし釈尊がなければ、その弥陀に生き、弥陀を説いてくださる人がない。すなわち、教主善知識がいなければ、その弥陀に生き、弥陀を説いてくださる人がない。すなわち、教主善知識がないならば、仏と人との交渉を知ることができない。」  
甲「それはそうだ。」

乙「法は必ず善知識が説き、その教法が弥陀仏を信ぜしめるのだ。すなわち、善知識が仏に帰命しつつ、仏の願意を説くのだ。仏教が、仏、法、僧の三宝に、絶対帰依を求めるのも、それがためである。仏（弥陀）をはなれて法もなく、僧（善知識）もない。三はそのまま一である。善知識の教法が絶対の權威として受けられる時、仏の願意にふれるのである。」

甲「いつのほどにか、仏、法、僧の三つになったが、大分よくわかってきた。」

乙「多くの人は、仏だけを抽象的に知ろうとする。それは、春の気候も梅の花もぬきにして、春だけを見ようとするのと同じである。仏、法、僧の三つが揃つての仏であり、法であり、僧である。」

甲「それに弥陀仏が信じられないのは、どうしたことか。」

乙「それは、邪見や我慢や疑いが邪魔をしているのだ。」

甲「どうしたら、それがとれるのか。」

乙「そこだ。そこに善知識がいて、育ててくれるのだ。南無弥陀仏の聖なるみ旨を聞いていると、だんだんに転回して、ついに如来の本願力に救われるのだ。」

甲「おれはとでもだめだ。」

乙「何がだめか。」

甲「こんなに聞いているのに信じられないのだから。」

乙「ほんとうに聞きたいのか。」

甲「そうだ。おれは聞きたくてたまらない。だんだん心が暗くなるようだ。おれは、如来はないとは言えなくなつた。それなのに信じてくれない。如来を信ずるにしたら、あまりにおれの過去は暗かつた。でたらめであつた。」

乙「よし、そこまでわかれば、そして求める心があれば、必ず如来の救いは信じられる。」

甲「このおれにも信じられるようになるか、どうかつづけて話してくれ。」